



**Data** 2025-121

監督・脚本：イジー・マードル  
 出演：ヴォイチェフ・ヴオドホツキ  
 ー／スタニスラフ・マイエル  
 ／タチアナ・パウホーフオヴ  
 ー／オンドレイ・ストゥプ  
 カ／マルティン・ホフマン／  
 ヴォイチェフ・コテク／ペト  
 ル・ルネニツカ／マリカ・ソ  
 ポスカー／ヤン・ネドバル

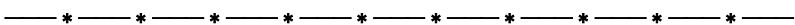
## 👁️👁️ みどころ

東欧の国・チェコスロバキアは私に、とって縁もゆかりもない遠い国。同国について知っていることといえば、スメタナの名曲、連作交響詩『我が祖国』くらい。しかし、1967年の「プラハの春」とは一体ナニ？それは1979年の「ソウルの春」や2010年の「アラブの春」との対比で語られるべきテーマだが、内向き思考の日本人はロクに知らないのでは！？

私が「プラハの春」を新鮮な驚きを持って知ることができたのは、1967年4月の大学入学と同時に活動を始めた学生運動のお陰。大学の授業には全然出席しなかったが、アジ演説とビラ書きに終始した学生運動の中では、必然的に世界情勢にも敏感に！

もっとも、1980年代に始まったソ連のゴルバチョフ書記長による「ペレストロイカ」の失敗が世界中に大きく印象付けられたから、私には「プラハの春」がなぜ実現できたのかはよくわからなかった。すると、本作はそれを学ぶ絶好の好機！そう思って勇んでスクリーンに臨んだが、さて本作の出来は？

「もしこれを放送できたら、世界が変わるー」。そんなクライマックスに向けてのストーリー構成はスリルと緊張感に溢れているが、架空の主人公を設定した脚本の是非は・・・？



### ■□■ プラハの春とは？まずはその歴史的事実の確認を！ ■□■

本作のチラシの「イントロダクション」の「前半」は次のとおりだ。すなわち、

世界中で若者たちの理想とエネルギーが爆発した1968年ーベトナム反戦運動、五月革命、文化大革命、日本の学生運動。ソ連の共産主義支配下にあった東欧のチェコスロバキアでも、若者たちがデモやチラシで民主化運動を起こした。その

機運は国中に広まり、検閲の廃止や言論の自由が認められ、ついに“プラハの春”が訪れたと国民が思った矢先、ソ連がワルシャワ条約機構の軍を率いてチェコスロバキアに侵攻。

私が大阪大学法学部に入学したのは1967年4月。選挙で自治会のクラス委員に選任された私は、学業などそっちのけでそのまま学生運動にのめり込んだから、上記の解説はよくわかる。1968年3月、チェコスロバキアのノヴォトニー大統領が辞任し、新たにドゥプチェク共産党第一書記指導の下にスヴォボダ大統領が誕生したことによって、検閲の中止や言論の自由等の民主化を進める、いわゆる「プラハの春」が始まったが、なぜそんなことができたのかはよくわからなかったものの、当時の私にはそれは何とも斬新なニュースだった。したがって、本作を観れば、なぜ「プラハの春」が実現したのかがよくわかるはず！

ところが、それから約半年後の1968年8月、ソ連とワルシャワ条約機構の軍によってプラハの春で湧いたはずのプラハの街は蹂躪されてしまったから、アレレ、アレレ。それは一体なぜ？そのことは、ベトナム戦争反対や佐藤訪米阻止、そして東大紛争をはじめとする大学紛争に奔走していた当時の私には、十分理解できなかった。

他方、本作には「不屈のラジオ報道」のサブタイトルがついているが、その意味は前記の「イントロダクション」前半に続く次の文章を読めばよくわかる。すなわち、

軍は、当時の最大報道機関であるラジオ局を制圧し、「ソ連がチェコスロバキア国民を救出に来た」とフェイクの放送を流そうとする。しかし、ラジオ局の報道局員たちは、権力と戦車に立ち向かい、回線技術を駆使し、ラジオ局の外から真実の報道を続け、市民を励まし続けた。

なるほど、なるほど。そんな感動作たる本作は必見！私はそう考えてスクリーンに臨むことに・・・。

## ■□■こりゃきっと感動作！！興行成績は？各賞の受賞は？■□■

チラシの「イントロダクション」のラストは次のとおりだ。すなわち、

この心揺さぶる感動の実話を描いた本作は、チェコ本国で8週1位、年間動員1位、国内映画年間興行成績1位、国内映画歴代2位と記録的なヒットとなり、チェコとスロバキア両国の国内最高映画賞16冠と圧巻の受賞。アカデミー賞国際長編映画部門ショートリスト（最終15作品）に選出された。

さらに、チラシには、「2024年チェコ 映画年間興行成績&動員 No.1」、「アカデミー賞国際長編映画部門ショートリスト チェコ&スロバキアのアカデミー賞で16冠」の見出しが躍っている。なるほど、なるほど。

さらにチラシには、「1968年〈プラハの春〉、ソ連軍の侵攻で放送局を占拠されても、市民と自由のために、真実の放送を続け闘ったラジオ局員たちの、緊迫の実話」や「戦車に囲まれても、命がけで報道を続けた、ラジオ局員たちの姿に胸が熱くなる、感動作」との

見出しが躍り、「ブラハの春」の影響」として、次の解説がある。すなわち、

“ブラハの春”は武力により1968年夏に数か月で制圧されたが、市民より生まれた民主化と自由を求める波は周辺諸国へと広がり、1989年にソ連の解体、東欧革命へと発展。またヨーロッパを越え、1979年の韓国「ソウルの春」、2010年のアラブ諸国の「アラブの春」へと影響を与えた。

なるほど、なるほど、こりゃきつと感動作！これを読めば、本作は必見！

### ■□■主人公は架空の人物！そんな設定の是非は？脚本の是非は？■□■

本作の主人公は架空の人物トマーシュ（ヴォイチェフ・ヴォドホツキー）。彼は中央通信局に勤務する技術者だったが、“ある事情”でチェコスロバキア国营ラジオ局・報道部の技術者として働き始めることに。彼には、チェコスロバキア国营ラジオ局の国際報道部長ミラン・ヴァイナー（スタニスラフ・マイエル）のオーディションへの参加を希望している弟のパーヤ（オンドレイ・ストゥプカ）がいたが、パーヤが採用されず、トマーシュがホフマン局長の推薦によってチェコスロバキア国营ラジオ・報道部の技術者として働き始めることになるから、本作導入部はそんなストーリー展開に注目！

もともと、本作の脚本を書き、監督したイジー・マードル監督は、そんな架空の人物トマーシュを本作の主演とし、その後の彼の行動や葛藤を浮かび上がらせるために弟のパーヤも架空の人物として登場させて、人間味あふれる脚本を完成させたが、私に言わせれば、その是非はイマイチ・・・？国際報道部長のミラン・ヴァイナーやヴァイナーのチームに所属する女性編集者、ヴェラ・シュトヴィツコヴァー（タチアナ・パウホーフォヴァー）等はキャラ豊かな実在の人物だから、これら実在の人物だけでドキュメンタリー的な「ブラハの春」、「不屈のラジオ報道」の物語を構築することも十分可能！そうすると、あえてトマーシュやパーヤのような架空の人物を登場させて、架空の物語を作り上げなくてもよかつたのでは？そんな印象も強いが、さて・・・？

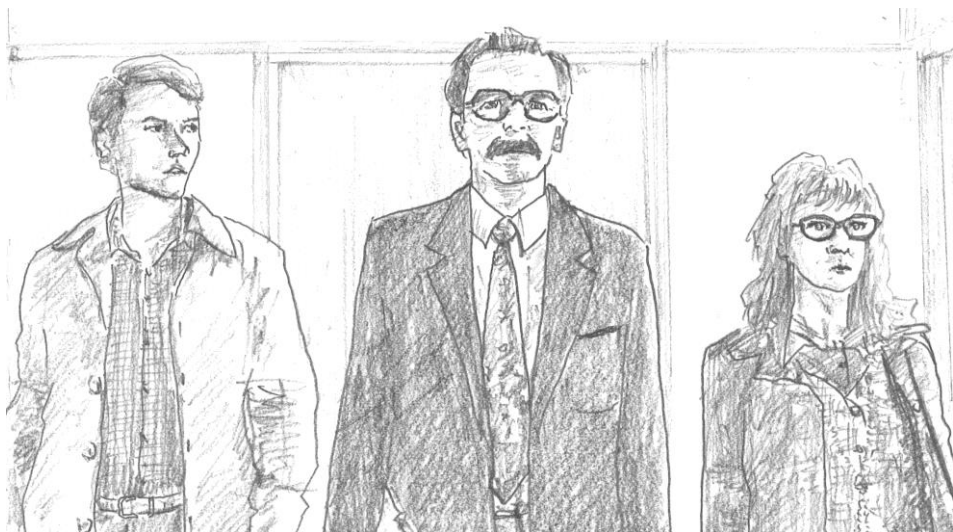
### ■□■監督が参考にした2つの映画とは？■□■

前述したとおり、私は架空の人物を主人公にしたイジー・マードル監督の手法に必ずしも賛成ではないが、パンフに収録されているイジー・マードル監督の「Director's Note」によると、本作のテーマは『「困難な時代に、大切な人をどう守るか」ということです。』とされている。そして「私は主に2つの映画からインスピレーションを受けました。映像的なダイナミズムという面では『アルゴ』（12年）、報道現場の雰囲気やジャーナリズムの精神という面では『グッドナイト&グッドラック』（05年）です。」と語っている。さらに、「本作にはスパイスリラー的な展開があります。どのような作品からインスピレーションを得たのですか？」の質問に対して、イジー・マードル監督は2つの作品を挙げているが、その第1は『東ベルリンから来た女』（12年）、そして「もっとも大きなインスピレーション源であり、公言もしていますが『アルゴ』です。」と語っているから、『アルゴ』から得たインスピレーションは相当大きかったようだ。しかし、『アルゴ』（『シネマ30』10頁）

の、どこからどのようなインスピレーションを得たのかについてのイジー・マードル監督の説明は、私にはイマイチ……。

## ■□■トマーシュはスパイ？それとも不屈のラジオ報道者？■□■

本作には、中盤からチェコスロバキア共産党の第一書記からチェコスロバキアの大統領に選ばれたスヴォボタの姿が登場する。彼はもちろん実在の人物であり、彼の大統領への就任は実話だ。スヴォボタ大統領の誕生によって「プラハの春」が実現したわけだが、それは一体なぜ？私たちはかつて、ソ連に「ペレストロイカ」を主導したゴルバチョフ書記長がいたことを鮮明に覚えているが、結局、彼のペレストロイカによる改革は失敗に終わった。それと同じように、ドゥプチェク第一書記とスヴォボタ大統領による「プラハの春」はわずか3~4ヶ月しか維持できなかったわけだが、それは一体なぜ？私は本作を観ればそれがわかると期待していたが、残念ながらそこらあたりの描き方が本作はイマイチ……？



他方、本作で架空の人物トマーシュを主役に設定したのは、「プラハの春」の到来とその崩壊にトマーシュの活動が大きく絡んでいたことを『アルゴ』並みのスリリングな面白さで描こうとしたためだが、本作を見ている限り私の目には、トマーシュは国家保安部 (StB) から脅され、“あるテープ”の所在についてしゃべった (口を割った) 時点から、ハッキリ言って国家保安部 (StB) のスパイだ。しかし、「弟の命に危険が及ぶかも……」と脅かされただけで、そんなに簡単にスパイの役を引き受けていいの？

もちろん、それだけではあまりにも単純な裏切り物語になり下がってしまうから、本作はそうではなく、チェコスロバキア国営ラジオ局・報道部の技術者として働くトマーシュ

が、ソ連とワルシャワ条約機構軍の戦車がプラハの街を蹂躪する中、軍事通信室の回線をつなぎ、最後までリレー方式で放送を続けたことについて、彼の信念と技術がいかに発揮される姿が感動的に描かれるわけだが、それでも私にはどうも・・・？

## ■□■軍事侵攻をラジオはどう伝えたの？クライマックスは？■□■

岡本喜八監督、三船敏郎主演の『日本のいちばん長い日』(67年)は、1945年8月15日の天皇陛下による「玉音放送」を阻止しようとする一部青年将校の動きが興味深く描かれていた。それに対して、本作のクライマックスは、プラハに侵攻してきたソ連とワルシャワ条約機構の軍隊(戦車)は、ホフマン局長がトマーシュに命じたように、「チェコスロバキア指導部の要請によるもの」とウソの放送をするのか、それとも「この侵攻はスヴォボダ大統領と第一書記ドゥプチェクの承認を得ずに行われた侵略行為である」と真実の放送をするのかの選択になる。

そんな極限的状况下、ヴァイナーの志を受け継ぐチェコスロバキア国営ラジオ局・国際報道部の有志たちは、逮捕まで覚悟した上で真実を伝えたからすごい。しかし、残念ながらホフマン局長が予告していた通り発信機を止めたため、その声が放送されることはなかった。しかし、そこで“技術家”としての実力をいかに発揮したのがトマーシュだ。彼はラジオ局の建物に軍隊が入り込んでくる状況下でも、軍事通信室の回線を繋ぐリレー方式によって真実を伝え続けたからすごい。

そんなクライマックスの感動的なシークエンスはあなた自身の目でしっかりと！

## ■□■もしこれを放送できたら、世界が変わる—■□■

本作のチラシには「もしこれが放送できたら、世界が変わる—」の見出しが躍っている。1968年3月に生まれた「プラハの春」は、同年8月にソ連とワルシャワ条約機構の侵攻によって崩壊してしまっただが、脳腫瘍で倒れてしまった国際報道部長ヴァイナーの志を受け継ぐトマーシュやヴェラたち有志の力によって、ソ連とワルシャワ条約機構の軍事侵攻が侵略行為であると放送されたのはすごいこと。そんな行動を取ったトマーシュたちの気持ちは、まさに「もしこれを放送できたら、世界が変わる—」ということだったはずだ。しかし、本作のチラシには、前記のとおり、「プラハの春」の影響として、「“プラハの春”は武力により1968年夏に数か月で制圧されたが、市民より生まれた民主化と自由を求める波は周辺諸国へと広がり、1989年にソ連の解体、東欧革命へと発展。またヨーロッパを越え、1979年の韓国『ソウルの春』、2010年の『アラブの春』へと影響を与えた。」と解説されているが、現実はまだにこの通りになったから、その歴史的事実の展開にもしっかり注目したい。

2025(令和7)年12月24日記